

# 日本における音楽コンクールの現状と意義：地域との関わりと関与者に焦点を当てて

西岡, 怜那

<https://hdl.handle.net/2324/7363800>

---

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (芸術工学), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 西岡 怜那

論文名 : 日本における音楽コンクールの現状と意義

—地域との関わりと関与者に焦点を当てて

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

音楽コンクールの存在は、長きに渡り世界中の音楽文化振興に大きく寄与してきた。本研究は、日本におけるコンクール運営の現状の概観を示すこと、地域組織によって開催されているコンクールの事例研究により、地域との関わりによるコンクール運営の実態と関与者にとっての意義を明らかにすること、そして、一連の調査を踏まえて、コンクールの意義、課題、可能性を検討することを目的としている。

序論では、WFIMC（国際音楽コンクール世界連盟）の歴史的変遷、コンクールの語源とその役割について論じた。そして、コンクールの運営や開催意義に関する学術的研究は、2010年に差し掛かる頃から行われるようになったばかりであり、コンクールの実態に関しては未踏の部分が多いことを指摘した。その上で、コンクールに関する先行研究とともに、関連分野である日本の音楽祭に関する研究、芸術における競争に関する研究を踏まえて、本研究の立場を明確にした。

第1章では、クラシック音楽におけるコンクールの歴史、構造、意義および批判に関する議論を整理した。その中で、コンクールは音楽家の発掘育成といった一義的目的だけではなく、出場者を中心に、様々な要素や人々が相互に作用する社会的プロセス・文化的枠組みとしても捉えられることを示した。また、コンクールは主催団体にとって、音楽界、地域社会、市民など、聴衆のあらゆる層にアピールし、文化的理想を体現する場として機能していることを指摘した。さらに、近年の国際コンクールにおける応募者の増加傾向を踏まえて、彼らは入賞を目指すことを前提としつつも、コンクールに出場することで得る学びを極めて重視しているという仮説を立てた。

第2章では、1932年の「音楽コンクール」設立から始まった、日本における音楽コンクール文化の今日までの変遷を辿った。また、2020年3月から2023年5月頃までのコロナ禍がコンクール史において転換期になったことを指摘し、コロナ禍のクラシック音楽界・コンクール運営の様子を述べた。そして、日本で開催されている259のコンクールを分析することで、我が国におけるコンクール運営の現状を概観した。さらに、その中で、自治体が主催する28のコンクールの実態を分析し、それらは自治体主体型と地域住民主体型に大別されることを明らかにした。また、音楽祭の現状との比較を通して、コンクールと音楽祭は両者とも80～90年代に多数設立されていたことが確認され、そのうちの多くは地域活性を目的に設立されたこと、さらに、その時期は日本のクラシック音楽文化が発展した時期としても位置付けられることを指摘した。

第 3 章と第 4 章では、ボランティアが運営に携わり、地域との関わりにより開催されている 4 つのコンクールの事例研究を行った。第 3 章は 2 つの自治体主体型コンクール、第 4 章は 2 つの地域住民主体型コンクールを事例対象とした。コンクールの概要を把握した上で、特に重要な関与者である地域住民ボランティア・聴衆・出場者を対象とし、アンケートやインタビューなど多角的に調査を行うことで、地域との関わりによるコンクール運営の実態、各対象者への意義と課題を検討した。運営の実態に関しては、自治体主催型は市の財団がコンクール事務局を担い、市が開催資金のほとんどを負担しているのに対し、地域住民主体型は地域住民組織がコンクール事務局を担い、開催資金は寄付が中心で運営されていることがわかった。また、全ての事例コンクールで、聴衆内の市民の 90%以上に「地域に貢献している」、「コンクールを誇りに感じる」と捉えられていた。そして、コンクールにはコンサートにはない特有の鑑賞の魅力があり、音楽経験に関係なくそのような魅力を感じられていたことから、コンクールは既存の聴衆以外にもクラシック音楽や演奏家への関心を喚起させることが示唆された。コンクールにおける地域住民ボランティアに関しては、運営を支えるという「提供」の立場だけでなく、(1)自己実現、(2)国際文化交流、(3)地域社会、(4)音楽文化という意義を「享受」する立場も兼備することが確認された。出場者へのアンケートでは、コンクールに出場する目的は「入賞しキャリアを積む」ことが前提という傾向は見られつつも、必ずしも絶対的ではなかった。また、コンクールに出場する意義に関しては、コンクールでの評価や経験、他者からの刺激、音楽面の成長、音楽面に限らない成長（精神力、実行力、計画力など）という全ての項目に回答が見られたことから、各人により様々な意義を感じられていることが認められた。そして、全ての事例コンクールで、音楽面に限らない成長という項目に 40%程度の回答があったことから、コンクールに出場する意義は音楽家としてという部分に限らず、人間的成長という部分にも大いに感じられていることが示された。

結論では、本研究で明らかになった日本における音楽コンクール文化と現状について総括した。事例研究の結果からは、コンクール運営に関わる人材の高齢化が喫緊の課題であり、これはクラシック音楽分野全体が抱える共通の課題であることを指摘した。また、コンクールの存続には地域住民の認知と参加を増やしていく必要があることを論じ、その上で、コンクールにおける地域の関与者の相互関係を可視化した。そして、コンクールは文化的包摂の場としての役割も果たし、音楽の専門的な領域とそうでない領域との架け橋になっていることを指摘した。本研究が音楽コンクールについて理論的に考究される契機の一つとなれば幸いである。